長岡市･与板町合併協議会
第2回新市建設計画策定小委員会

議　事　録

第2回新市建設計画策定小委員会会議録

1　会議を開催した日時及び場所

・日　　時　　平成１７年2月3日（木）　　午後5時

・場　　所　　長岡市役所第3委員会室

2　会議出席委員の氏名

豊口　　協　　二澤　和夫　　大地　正幸　　安達　正廣

石丸　誠亮　　阿部　誠一

以上　　6名

（欠席委員の氏名）

鯉江　康正

以上　　1名

3　議題及び議事の要旨

別紙のとおり

長岡市・与板町合併協議会新市建設計画策定小委員会

◎事務局（北谷）

本日は、お忙しいところお集まりくださいましてありがとうございます。ただいまより長岡市・与板町合併協議会第２回新市建設計画策定小委員会を開催いたします。

なお、本日の小委員会は鯉江委員が欠席ですが、規程により会議が成立していることをご報告いたします。

初めに、資料の確認をお願いしたいと思います。資料は、資料１、２、３でございます。

それでは、お手元の次第に従いまして進めさせていただきたいと思います。

恐れ入りますが、発言の際はマイクを使われますようお願いします。

まず初めに、小委員会委員の変更がございましたので、報告いたします。

資料１をごらんください。与板町助役の佐々木様にかわり、与板町総務課長の安達様が委員に就任されました。本日の会議より出席していただいておりますので、ご報告いたします。

安達委員、よろしくお願いいたします。

この後の議事進行につきましては、豊口委員長よりお願いいたします。

◎委員長（豊口　協）

それでは、議事を進行させていただきます。

既に第１回の委員会も開かれておりまして、６市町村で作成されました新市将来構想、ここには４本の柱があるわけでありますけれども、新市の地域らしさの価値をベースにいたしまして、新市民と行政とが共有しながら協働して地域の夢を高めていくということが確認されております。今回新しく与板地域の特性を活かし、活動そのものを継続していくということによりまして、新市の地域らしさの価値を高めていこうと、こういうことになっておりますので、それをベースにいたしまして、今日の内容につきましてご審議をいただきたいと思います。

今日の最初の内容でございますけども、地域別整備・活動方針について、これがお手元にお配りしてあると思いますが、事務局から説明をお願いしたいと思います。

◎事務局（竹見）

それでは、事務局からご説明いたします。事務局の竹見と申します。

それでは、お手元の資料２と資料３をごらんください。次第の地域別整備・活動方針につきましては、将来構想の第４部に該当するものでございます。そちらに追加するということになります。

それで、資料２につきましては、いわゆる与板地域の夢、地域別整備・活動方針の検討の中についてまとめてございます。こちらを検討するに当たりましては、与板町の職員の皆さんからワーキングチームをつくっていただきまして、事務局とコンサルタントで一体となってつくってまいりました。

それで、こちらに書いてありますように、ステップ１としましては、地域の歴史とか、そういった風

土、住民活動などの整理をして地域資源の洗い出しあるいはその絞り込みを行ってきたと。そして、地域らしさ価値実現に向けての役割をいろいろ検討しまして、地域らしさ価値を高める、そういった地域の強み、方向性と実現すべき事柄を整理し、そして最終的に活動方針と活動展開を検討してきたということでございます。本日与板地域の夢の素案として取りまとめまして、今回お諮りするものでございます。

続きまして、資料３をごらんください。こちら４ページ構成になっております。１ページ目が与板地域は、こんなところということで、与板町の成り立ちなどをこちらにまとめてございます。

続いて、２ページをごらんください。２ページ、３ページは、それぞれ地域らしさ価値ごとに与板地域の活用したい地域資源や実現すべき与板の姿、そして実現していくための活動展開をまとめています。与板地域が合併後にどういう役割を担っていくのかを明確に示してあります。そして、それによって住民の方々が地域においてどういう活動をしていったらよいのかがわかるような、そういった活動の方向性を示しているということでございます。

そして、４ページがもっと詳しく地域の力ということで、与板地域の、こちらに書いてありますように登り屋台だとか楽山亭などの地域の力というものを紹介しております。

それでは、資料３につきましては、本日与板町の職員の方がいらっしゃっていますんで、職員の方からご説明いただきます。よろしくお願いいたします。

◎与板町総務課（吉川）

ごめんください。私、与板町の総務課の吉川と申します。本日まで新市の基本構想、与板町の地域の夢作成に当たりまして、長岡市事務局の皆様、それからコンサルの皆様方と数回協議を重ねてまいりまして、本日案という形で提案をし、これからご説明申し上げたいと思いますので、なおワーキンググループ９名おりまして、本日は３名で参加をさせていただきました。よろしくお願いいたします。

まずもって、説明に入ります前に、町で説明用の資料を若干用意いたしましたので、これから委員の皆様方に配付をさせていただきたいと思いますので、委員長をはじめ委員の皆様よろしくお願いします。

それでは、お手元の資料、地域の夢につきましてご説明を申し上げたいと思います。新市基本構想に掲げます与板町の夢でございます。まず、与板地域は、こんなところにつきましては、去る１月28日の委員会にて、総務課長のお話があったかと思いますので、簡潔にお話をさせていただきたいと思います。

当町、新潟県のほぼ中央に位置し、中にイラストがございますが、ごらんいただきますとおり、東側には信濃川、西に西山丘陵を擁しまして、水と緑に恵まれたまちでございます。長岡インターから車で20分、中之島・見附インターから車で15分という環境にございます。自然に恵まれたまちでございます。

続いて、その下の黒四角をごらんください。名将が治めた城下町ということでありまして、当町には明主が居城した三つの城跡がございます。上杉謙信の重臣として手腕を発揮した直江景綱などが居城しました本与板城、山城でございます。上杉景勝の重臣であり、豊臣秀吉をして、「戦国武将３大人物の１人、希代の英傑」と言わしめた直江兼続が居城した与板城、これも山城でございます。江戸時代から

井伊氏が居城した与板城、これは平城であり、城跡が三つございます。ここに出てきました戦国武将３大人物の１人が直江兼続でございますが、あと２人、小早川隆景、堀直正、この３人が当時３大人物の３傑と言われた人物の中の１人が与板城主であります。

続いて、右上には、史蹟保存会等によりこの城址の保存と歴史が受け継がれております。城山保存会と本与板城址保存会という二つの保存会がございまして、城山では86名の会員、本与板の方では113名の会員が今保存継承に当たっておられます。

次に、歴史的な文化財も多数当町にございまして、県の文化財の指定を受けております、両方の山城をはじめ平城の与板城、既にございませんが、そこに擁していました入り口と通用口である大手門と切手門という門がございます。その門は、現在新潟別院の表門、それから恩行寺というお寺の表門に以前の入り口と通用口である門が今移築をされて保存してございます。また、井伊直政が徳川家康から賜りました孔雀尾具足羽織というものがございまして、含めた19のものが町の指定文化財となってございます。

続いて、地域活動が生きる教育環境でございます。当町１町１校でございまして、保育園、幼稚園、小中学校が１校ずつございます。そのために、地域と学校のつながりが強く、いろんな住民の方々と子供たちが触れ合う機会がたくさんございます。歴史、文化がございますが、動植物の中には「与板の植物」という与板にある草花を集めた本が１冊ございまして、650種の与板にある植物が掲載をされている本が一つございます。また、１町１校ですので保育園入園から中学校卒業までは、いつも同じ仲間と生活をし、生涯友達関係でもいられるという、そういうまちでございます。

社会教育とのつながりの関係につきましても、いろんな活動がここに記載してありますように、日々展開をされております。幼稚園には、清風園という西山にございます遊園をできるところ、小学校の隣には河川公園、中学校の隣には黒川堤防がございまして、それぞれ各学校の児童生徒が豊かな自然に囲まれた環境の中で生活をし、次世代を担う心豊かな人材を当町はぐくんでいるということで行っております。

それでは、次のページをお願いします。独創企業が生まれ育つ都市、まず一つ目でございますが、これを高める方向性といたしまして、特有の地域資源を他地域との交流を通じてこれまでになかった活用方法などを考えていくことで、新市全体の独創力を高めるという方向性を出しました。当町気風といたしましては、のんびり、伸び伸び性格の人が多いというふうに感じております。その方々が元気を出し、新市での役割、新市で活用できるものを確かめ、これから進めていきたいと思っております。この方向性に当町にございます地域資源、越後与板打刃物以下、そこに記載をしてございますが、今ほど配付をさせていただきました地域資源の説明資料をごらんいただきたいと思います。

白ナンバー１に独創企業が生まれ育つ都市というところで、①から⑧までの番号が振ってあります資料がございます。表紙をはぐっていただきますと、資源の①、中段から下の方になりますが、①、越後与板打刃物、かんな、のみ、ちょうな、ほかにまだございますが、これらを製造する伝統工芸士、当時1

2名の工芸士でした。現在は、11名の伝統工芸士がいらっしゃいます。その方々が伝統産業、工芸品として製造されているのが、その中央にあります、のみ、かんな、ちょうな等々がございます。時間の関係もございますが、本日そのものを持参をいたしましたので、少しごらんをいただければと思います。

本日お持ちいたしましたのは、与板で伝統工芸士さんが製作をされている、向かって左側の箱入りがかんなでございます。日本一切れる、すばらしいかんなでございます。真ん中に木の柄がついています長いものがございますが、これがちょうなと申しまして、粗削りをする際に、トンカン、トンカン、トンカンとまず木を削ると、それからかんなでさらに削り、一番右手にございますのみで、さらに仕上げていくという与板の産業品でした。ごらんいただきましてありがとうございました。

続きまして、次のページの③、日本一の大かんな、今ほどごらんいただきましたかんなは、通常のものでございますが、与板町にはこういう大きなかんながあります。長さが縦181.5、幅80センチ、厚さが10センチ、重量78.8キロ、刃の大きさが幅62.5センチということで、この日本一の大かんな、与板の伝統工芸士さん、職人さんがつくられて、今当町で展示をしているところでございます。その下の写真につきましては、工芸士さんのお一人でございますので、ごらんをいただきたいと思います。

それから、次の④でございます。ふいご祭りというものがございまして、そこに書いてございますように、11月に金山神社、その神社の隣にあります金山神社でふいご祭りが開催をされる。通称村のかじ屋と申しまして、実際に鉄を火に入れまして、この姿でトンカン、トンカンとつくり上げていく工程を維持していくお祭りでございます。２枚の写真がございました。

次をお願いいたします。これは、小学校の社会科で地場産業の学習会を、伝統工芸士さんを招きまして、つくり方、物のでき方、使い方等々の学習をし、地場産業といいましょうか、伝統産業を子供たちにも継承していただきたいという願いで、学校の一つのカリキュラムの中に組んでございます。

続いて、次のページをお願いいたします。下の方に、⑥、特産品日本一の大豆でございますが、これにつきましては当町転作が始まりましてから圃場のよさのおかげで日本一になったこともございます。その大豆を納豆とか豆腐なんかにぜひこれからは使っていければなということで考えております。

上の方をごらんいただきますと、⑦、特産品としまして、竹炭、竹酢液、これにつきましては、平成11年県事業の助成をいただきまして、馬越たけのこ生産組合という現在15名の会員がいらっしゃいますが、その方々が日々取り組んで製造、出荷をされております。それをちょっとお見せしますので、竹炭、どこにもありそうなものでありますが、調べましたら、県内では45の取り組んでいる団体、個人がいらっしゃるそうです。そのうち、組織でやっているのが三つの組織でございます。当馬越生産組合を入れて三つですので、個人感覚では数ある中にも、組合で挑戦しているところは数少ないということで、これをぜひ頑張っていきたいということで挙げさせてもらいました。

次の⑧以降につきましては、学校の授業風景とクリーン奉仕活動、農業体験、グリーンヒル、施設の訪問等の分野がここにございまして、ナンバー１、資源の説明は終わらせていただきまして、もとの資料、地域の夢の実現すべき与板の姿をごらんいただきたいと思います。

整備・活動方針につきましては、高める方向性に今ほど申し上げました地域資源をあわせ、特有の地域資源を活用した独創の企業を進める地域の形成をめざし、歴史や自然が培ってきたさまざまな地域資源を活用し、新しい切り口による製品や技術、ビジネスの開発につなげていきたいということでございます。このことによって、活性化へとつなげていきたいと考えておるところでございます。

これを実現していくための活動・展開でございますが、見極め、伝統技術をはじめたくさんの資源の活用方法について、地域のさまざまな組織・人材と共同で考える仕組みづくりを行うということでございまして、資源の確認と活用の改革をこれから行っていき、与板地域のいっぱいある地域資源のそのものを発信し、他地域資源との連携の基礎としたいと思ってございます。与板町は、先ほどマップ、イラストでもごらんいただきましたように、コンパクトにまとまっているまちでございます。そのまちの中には、大体の設備等がそろっておりまして、それらについての資源を利用し、これからは全地域へと向けていきたいというところでございます。

育てるにつきましては、産業開発、要は産・学・官の協力による新製品開発等に取り組んでいきたいと思ってございます。なお、教育の一貫的、先ほど申し上げました子供たちへの伝承、体験から住民交流を深めて子供たちにも継承をしてほしいと考えているところでございます。

続いて、二つ目の元気に満ちた米産地を高める方向性といたしまして、各地域における様々な文化を保存、発掘し、地域づくりの「心の核」としていくことで「元気に満ちた米産地」の文化を体現する地域としての一翼を担う方向性を考えました。各地域といいますのが、町部、農村部にいろんな文化、歴史がございます。それらを具体的に表現をしていこうというものでございまして、地域資源、ＣＡＮのところに黒丸五つほどございますが、先ほどの資料戻っていただきまして、白ナンバー２、信濃川舟運が育んだ歴史文化ということで、次ページをご覧下さい。ここに絵がございます。与板橋というのは昔このような橋でございまして、信濃川を通る川舟、川蒸気船、「安進丸」等々が行き来しまして、河川交通による商業振興をやってきたところでございます。

下の方の左側に地図のとおり川が流れておりまして、与板町は、川を渡って新潟まで行ったところでございますが、後ほどまた申し上げますが、当町には回船問屋、大坂屋という豪商があり、その大坂屋は与板から米、野菜等を積んで船で上り、京都、大阪の方へそれを売りに行きます。帰りに書籍、薬、反物などを仕入れまして、それを商売のもととし、繁栄をしたというところでございます。

次のページごらんいただきますと、②、楽山亭とございますが、楽山亭のちょうど真ん中辺、２段目の真ん中辺にございますが、外露地門の看板や渡り廊下には、かつて回船等で使用した舟板を用いているとございます。今ほど申し上げた河川交通から大坂屋さんの回船問屋と船で商売をしていた地域でございますので、その名残、大坂屋の三輪さんが当初建築をされたものであり、材料として船で使っていた板を用いているというところでございます。

それから、その下の方に各地域の文化でございます吉津神楽というものがございまして、約400年前にこのものがあったということでありまして、村の繁栄と安泰、五穀豊穣を祈る風習を守り継いでいると

いうところでございます。あと２地区にもこの神楽舞いがございまして、農村部にも伝統ある芸能、文化が、その中の一つでございます。

それから、次の④をごらんいただきたいと思います。河川公園実現に取り組んだ地域の動きということでございまして、黒川の流れを変えるという表現がございますが、右側の川の図をごらんいただきますと細い川が信濃川まで延びていたところでありますが、水害等ですごく苦しみました。それを何とかしようということで、昭和41年から44年にかけて住民の要望を含めまして、左側の黒川といいますか、新しい川を信濃川の方へつなげました。よって、今までの小さい川を旧黒川と呼ぶようになりまして、その旧黒川の堤防、つまり当初はこの川が与板を守る川でございまして、新しい川ができたおかげで、要は堤防の高さがそこまで必要ないということになりました。それを住民、町が堤防の嵩を下げていただくよう要望し、それによってできました敷地を昭和53年から61年まで、第１期河川公園整備として取り組むようになりまして、第２期が平成３年から平成７年まで、第２期工事で現在の河川公園に変わって親しんでいただいているところであります。内容については、また後ほど若干申し上げたいと思います。

続いて、蛍でございますが、どこにも蛍という会はもちろんございます。当町の蛍につきましては、市街地に蛍が生息をしているということでありまして、県等の協力をいただきまして、千体川という川がございます。そこは、山からきれいな水が流れてくるところであり、当時は平成に入るまではまだまだ汚れて、なかなか自然の生物が生息はできる状況ではありませんでした。それを蛍を守る会、平成６年に設置されました13人のメンバーがその整備を要望し、与板町にも蛍を飛ばそうやと、蛍を見ましょうやということで、その取り組みがなされました。次のパンフレットをごらんいただきますと、A、B、Cと与板で蛍が発生する場所が大きく３カ所ということで、北に１カ所、C、南にAとBがございまして、Cは農村部でありますが、AとBは市街地に接するところで蛍が生息をしているという自然のよさをお話を申し上げたいというところでございます。

また、地域の夢のプリントへ戻っていただきまして、この資源をもとに整備・活動方針を考えたところであります。地域づくりのよりどころとなる「歴史と田園が織りなすふるさと」の形成というテーマに、登り屋台やかぐら舞いなどの、各地域の文化の相違性を再認識し、それぞれの文化を共有することで、統一的な真の地域づくりの信念の形成と、景観形成などによる信念の具現化を展開するというものでございまして、登り屋台は町部の歴史文化、神楽舞いについては農村部というふうに各地区でございます。それらをこれから統一的な見解で進めていき、与板に戻ってきた人、また訪れた人のよりどころとなり、またいつの日にか思い出していただきたいという願いを持って、これから取り組んでいきたいと思ってございます。

その実現するための活動・展開につきましては、見極めにございますように、農村部のかぐら舞いなどの伝統芸能、伝統文化、風習の掘り起こし活動、これらは先ほど申し上げた神楽舞いのほかにさいの神や盆踊りも農村部では開催をされております。

次には、登り屋台、寺社など地域にはいっぱい資源がございますので、それらの資源、イベント等含めまして、だれでも参加ができるようこれから考えていきたいと、それによって地域の資源の生かし方を含め、地域づくり活動全般を発信し、他地域の事例をも収集をしながら、成長をしていきたいということで考えてございます。

育てるにつきましては、与板地域全体の共有価値をはぐくみ、具現化として現在よりもよい環境に変えていき、市民、行政が協働で行っていきたいということで、住民が集まる場、元気が出る場を与える用意をしたいと考えているところでございます。

続いて、三つ目でございます。世代がつながる安住都市の方向性でございますが、他地域との交流をもとに、これから問題点や課題を発見することで、真心で地域づくりを進めていきたいという考えでございます。外から見た意見、感想を取り入れて、我々市民が気づかないところをいろいろまたアドバイスを受けながら進めていきたいというところでございます。

また、資料に戻っていただきますと、資料ナンバー３、世代がつながる安住都市、①から⑥までございます。①ごらんいただきますと、積翠菴ということで、これはもうご案内のとおりと思いますが、三輪潤太郎がこの地に越後柏崎の茶人、松村宗悦が表千家に伝わる有名な茶室、不審菴を模した茶室をつくりました。それを三輪潤太郎が好み、積翠菴としてこの地に建築をしました。現在は、そのものは北方博物館に再移築されておりまして、与板町積翠菴をそのものそっくりに新築をし、ここに設置をしてございます。

続いて、次の資料②、良寛ゆかりの石碑でございますが、これは現在20基の良寛に関する石碑が河川公園、いしぶみの里ゾーンに設置をされているものでございます。

続いて、③、志保の里荘デイサービスでございますが、社会福祉の拠点となるものとして町が考えて設置をしてございまして、日々利用いただいているところであります。

次に④、障害者地域交流センター、これはふれあいときめきハウスということで、障害者、軽度の方がここで仲間と一緒に触れ合いながら仕事をして生活をするということで、平成13年３月に完成をした交流センターでございます。

続いて、次は今度西山にありますうまみち森林公園でございますが、リニューアルに昭和59年ころから第２次林構で整備をした中に森林公園がございましたが、近年傷みましたので、もう一度整備をし直しをし、現在この姿の公園になっております。なお、うまみちという名前につきましては、昔々与板から隣のまちへ行くに馬を連れてこの山道を上り下って、こっちからは野菜等、米等を運び、帰ってくるときは塩とか魚とかを積んで、かついでいいましょうか、馬にかけて行ったり来たりした、その道がうまみちとなって名前がついております。

次の６番、伝統芸能子供教室につきましては、これ三味線教室でありますが、地元に藤本会という三味線の会があります。その方々の指導のもとに、継承していこうということで、与板十五夜まつりや芸能発表会に参加をしながら、日々練習をしているところでございます。

また、戻っていただきまして、四つ目の世界をつなぐ和らぎ交流都市を高める方向性としまして、新長岡全体の視点から与板の資源の役割と活用法を模索し、提供する地域の創造を目指すという方向性、いろいろな資源がございますので、これらを他地域との連携を図って進めていきたいというものでございます。

失礼いたしました。その上の安住都市のＷＩＬＬですね、整備・活動方針に戻っていただきます。積極的な活動で、常に育ちつづける地域人づくりという方針を立てました。何でもある現状に満足せずに、他の地域との交流でさらに育ち、伸び、安心、安全なまちづくりを進めていきたいという考え方でございまして、見極めについては、地域資源の客観的な強みを認識する活動の実践、みんなが今まだ見えていないものがいっぱいあると思われますので、それらの再確認をして学校教育活動を地域全体にも浸透させていきたいということでございます。

発信につきましては、与板地域の評価を近隣の町村等からいただいて、その評価をもとに、また改正をしていきたいというところでありまして、育てるにつきましては活動人材を中心に調査結果を振り返り、話し合う仕組みや環境づくりを行っていきたいというものであります。豊富な資源で地域の人々が求めるもの、他地域との人と共感できる環境づくりをしていきたいということで、考えてございます。

続いて、四つ目の世界をつなぐ和らぎ交流都市でございますが、新ながおか全体の視点から与板の資源の役割と活用方法を模索し、提供する地域の創造を目指すということで、方向性を立てました。資源につきましては、資料のナンバー４、①から⑥までございますが、まず①、与板祭りの中に登り屋台というものがございます。ここに書いてございますが、二百余年の年月を持って９月の金、土、日、３日間にこのお祭りが開催をされ、登り屋台で生き生きした人々、この屋台に乗ったり引いたりできるものでありまして、これが一つの町のシンボルでございます。今日は、ちょっとその様子をごらんいただきたいと思います。屋台の前方にちょうちんをかざす若者が上段に五、六人、下段に五、六人乗りまして、はっぴを着、太鼓の音のタラントロン、タラントロン、タラントロン、タラントロンという音楽が鳴るのですが、それに合わせてちょうちんをかざし、そしてわっしょい、わっしょいと引き手に対し気合いを入れ、引き手はまさにその気を受けまして引っ張り、また騒ぎ、祭りがにぎやかに進んでいくということでございます。ありがとうございました。

次に、河川緑地たちばな公園でございますが、先ほどもちょっと触れました、あわせてリバーパークフェスティバルも開催をされておりまして、この公園先ほど申し上げました計画により、現在330本の桜、東京都葛飾区堀切菖蒲園から株分けをいただき、40種18万本を植栽してあります。平成６年には、町の木がその桜、花が花菖蒲と選定をされており、その川沿いには遊具等がいっぱいございまして、日々町内外の皆様から利用いただいているところであります。公園の総面積が約６ヘクタールございまして、現在このような姿でございます。

次のページにつきましては、リバーパークフェスティバル、年に１回５月の第４日曜日ころに憩いの場として開催をされ、これは住民グループの立ち上げによって実施をされているものであります。

続いて、③、楽山苑ライトアップ、琴と尺八の共演ということでございます。楽山亭につきましては、先ほど触れさせていただきました。これは、５月、新緑のころ10回を数えるイベントとなってございます。この楽山苑には、楽山亭、観音様、良寛ゆかりの石碑、先ほど申し上げた積翠菴がございます。それをまとめてライトアップ事業で皆さんから親しんでいただき、その下には和風演奏の琴と尺八のイベントで、各地からごらんをいただいているところでございます。

続いて、次のかぶとをごらんいただきたいと思います。与板城主でありました直江兼続が当時着装をしておりました愛という文字が前についておりますかぶとでございます。

次ページをお願いします。直江兼続とはどんな人物だったかということで書いてございますが、1560年、永禄３年に六日町坂戸城の城主長尾正景の家臣、樋口惣右衛門兼豊の長男として生まれて、縁ありまして与板町と関わることとなりました。幼名は与六と申しまして、樋口家に生まれました。兼続は、直江家の名跡を継ぎ、与板城主、当時23歳でございました。最後は、会津に景勝、兼続合わせて150万から30万石に削封されまして、お墓は林泉寺にございます。

次のページは、その銅像を与板町でつくったものでありますし、その下の旗は城山山開きの際に道路とか城山の登山道等にこれを掲出をして皆さんから見ていただいているということでございます。

その次が、まごころ込めてつくった大判焼、これは与板町であるお店屋さんがつくっています日本一大きい大判焼き、直径が13センチで、厚さが約７センチございます。全日本大判焼き早食い選手権大会ということで、与板町過去３回、昨年ちょっといろいろありましたので、中止をしましたが、過去３回開催をしました。年々参加者もふえておりまして、予選が３個早食いで、だれが一番早く食べるか、決勝が10分でだれが何個食べるかということで競う代物であります。今日は、その大判焼きをお持ちいたしましたので、まずはごらんをいただき、こんな大きさですというのを目でひとつご確認をいただければと思って参りました。中身はあんことクリームとチーズがございまして、今日はあんことクリームをお持ちしましたので、それ一ついただくと大体夕飯は要らなくなるかもしれませんが、ひとつ与板の特産でございますので、ご紹介を申し上げました。

それらこれらと、当町は交流の輪を広げていきたいというところでありまして、現在も東京堀切との交流を行っております。夏休みには子供たち、秋には大人の皆さん十五夜においでいただいたり、交流を深めているところであります。

最後のものについては、株分けいただいた花菖蒲の生息している河川公園の絵でございますので、ごらんをいただければと思います。

また、戻っていただきまして、整備・活動方針でございますが、豊富な歴史文化や人柄が創る、まごころのもてなし発信地域と題しました。与板町は、心と触れ合いの交流を真心満タンで進めていきたいと考えておりまして、先ほど申し上げた東京堀切との交流は、疎開が縁で始まりました。平成２年から現在まで続けている大人と子供の皆さんとの交流でございます。

見極め、発信、育てるにつきましては、見極めは、地域文化等これから人材の活用方法を考える活動

等でいきたいということでありますが、継承者の育成等もこれから考えていき、その質が高く、魅力的な新ながおか観光ルートの検討と提案活動をやっていきたいということで、与板町、先ほど申し上げましたように、真心で接するまちと考えておりますので、景観形成と資源を強く示すためのルートを設定をしていき、発信する新ながおかもてなしネットワークの提案を発信しながら、他地域との意見収集活動を行うと、いろんなご意見を聞きながら進めていきたいということでございます。

育てるにつきましては、ネットワーク形成において重要な事柄（民泊推進など）を積極的に取り組んでいきたいと、人情、触れ合いのまちづくりとして進めていきたいと考えております。

最後のもっと詳しく地域の力でございますが、これは今まで各分野の資源の中でご紹介を申し上げてきましたので、前文をちょっと読ませていただきまして、終わりたいと思います。

「西山丘陵の自然を活かした森林公園や中腹にある楽山亭から市街地を見下ろすと、そこには広大なパノラマが目に映ります」と、与板の西山丘陵は標高約150メートル前後の山がずっとつながっております。そこに城山、楽山亭、その位置から平野を見ますとすごくきれいなものが入ってきます。「水静かなる信濃川」というのは小学校の校歌にも歌われている大河信濃川は前面、あとはその平地においしい米があり、越後平野の一端を担う水田がございます。先ほどご説明申し上げましたように、自然、歴史、文化、人、豊かな資源が与板町をつくっているというふうに感じており、その自然がつくり出して、生み出してくれる人づくりということで、以下記載がございますが、後ほどごらんをいただき、五つの紹介するものがございますが、今まで説明の中で申し上げてきましたので、省略をさせていただきたいと思います。

大変長くなりまして、申しわけございませんが、終わります。ありがとうございました。

◎委員長（豊口　協）

どうもありがとうございました。

四つの柱の中の具体的な内容をビジュアルに全部まとめていただきまして、よく理解できたと思います。何か桃源郷の中の案内をしていただいたような気がしまして、非常に楽しくなったのですけれども、今ご説明いただいた内容をベースにいたしまして、委員の方々からご意見ないしはご質問がありましたら、お願いしたいと思います。

はい。

◎委員（阿部誠一）

ちょっとお願いしたいんですけど、まず独創企業が生まれ育つ都市の活用したい地域資源に自慢の大判焼というのがありまして、これはここに記載することについてちょっと違和感をさっきから感じていたんですけども、今説明があったんですけども、大きさが自慢なんですね、これ。自慢というのは、大きさが自慢なんですね。

「味も」と言う声あり

◎委員（阿部誠一）

そうなんですか。これというのは、１軒がつくっているのですか、それとも数軒がつくっているんでしょうかね。

◎委員（阿部誠一）

それじゃ自慢というのは、何が自慢なのかはっきりわかるように、大きさが自慢のと何か補足した方がいいのかなと、ここに記載するならですね、そんな感じを受けました。

それから、もう一点なんですけども、元気に満ちた米産地の中の活用したい地域資源なんですけども、これ和島村の地域の夢の中でもそういうことを私申し上げたんですけども、与板も結構人工林ございますよね。里山に優良な森林資源持っていますんで、和島村さんもここに活用したい地域資源に地域の林業力だったでしたかね、そういう記載をしたところなので、それとのバランス上、和島村とのバランス上、与板町さんについても、ここに林業について優良な地域資源として活用するものであるというふうに思いますので、林業について触れた方がいいんじゃないかというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

それとちょっとつながっているんじゃないかと思うんですけども、伝統工芸のかんなとかちょうなとかのみがありましたけど、こういう道具で実際おつくりになっている製品というのはあるんでしょうか。

それは、全国的な何か商品として流通はしているのでしょうか。

◎与板町総務課（吉川）

その件につきましては、確かに物はすばらしく、また高価なものですので、需要の方がなかなか伸びず厳しいところでございます。でも、一回買うと何十年ももちますので、なかなか、はい次、次とは買いかえる必要がございません。ただ職人さんは、あえてそれを好んで利用し、住宅建築等に使っていらっしゃいます。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

ほかにございませんか。

◎委員（大地正幸）

日本料理なんかの場合に、板前さんが大変有名な職人のつくった包丁ですね、それ持つこと自身が目標であり、また自慢でもあると。したがって、いわゆる名人と言われる方が、私よくわからないけど、新潟県にいるのか、あるいは岐阜県にいるのか、そういった方々おられるというふうなことで、有名になっているというようなことはありますね。そういうことからすると、いわゆる伝統工芸である大工道具、そういう方々の伝統工芸士さんのおつくりになったものというのは、今大工さん自身も電動工具が多くなっているけれども、ただ神社仏閣ですね、ああいった宮大工さん等はああいう電動工具じゃない、いわゆる伝統的な機械でないもの、道具をお使いになっているんだろうなと思うんで、その辺の深み、

厚みといいますかね、いわゆる、そういうふうなものを、今こういった大工道具は与板がやはり全国で中心的な位置を占めているとすれば、そういううたい出し方もあるでしょうし、その中でもこの人のこれは大変なものですよというふうなものは、これはさみなんかもたしかそうだったような感じがするんですけどね。はさみ、それからのこぎりがそうじゃなかったでしょうかね、与板ののこぎりというのは全国的に力を入れなくてもよく切れるというようなことで、大工さんの中では大変評判だったようにお聞きしていたんですけども、そういったことをもしやるなら、いわゆる本当の意味の本物中の本物ですよというようなうたい出し方というが、やはりいいかなというふうに思いますし、また鑑賞用というかね、日本刀は現在使用されてないですよね、使用されると大変ですが、しかし美術品とかいうふうなもので、大変外国人にもそれなりの人気が高いというようなこともありますので、目指す方向としてそういった方向もいいのではないのかなというふうに思いますが、その辺のことで現状どんなもんなのか、ちょっと教えていただけますか。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。何か補足説明。

◎与板町総務課（吉川）

今ほどのお話でございますが、確かに伝統工芸品、工芸士、職人さんもいられて製造に一生懸命、日々頑張っていらっしゃいます。昭和50年ごろに比べますとかじ屋さんの数も激減して、現在は33のかじ屋さんがやっていられます。昔は100も150もあったようでございますが、その方々は先ほど申し上げましたように、職人さんが使うすばらしい技術ある工芸品をつくって頑張っていらっしゃいますし、また近年は彫刻刀とか、また違うものにも仕事を伸ばされている方もいらっしゃいます。今ほどお話がございましたのこぎりは、与板町よりも三島町の方が多うございますので、ちょっとのこぎりは触れません。

当町かじ屋は、そもそもが日本刀、刀かじが変身して大工道具をつくっているようになったと聞いておりますので、我々のスタッフの会議の中でも、また刀つくろうかいというような話も実は出ました。あわせて嫁さんに使ってもらいたい包丁をつくろうというような話も実は出まして、先ほど申し上げませんでしたが、大工道具、それはそのままするし、また別の製品をいろいろ研究、開発をしていって、要は技が使える品物をこれから取り組んでいきたいという気持ちはございます。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

三条市に負けないで、すばらしい刃物、新ながおか市の刃物産業というものを全国的に展開するとすばらしいと思うんですよね。特に日本の伝統的な日本刀の技術から生まれた刃物というのは、これは世界に冠たるものでございまして、将来世界の市場にこれがもし輸出できるようになりますと、なかなかおもしろい展開ができるんじゃないかという気はいたしますが、できるだけそういう方向でいければいいなと思います。ありがとうございました。

ほかにございませんか。

◎事務局（北谷）

委員長デザインの包丁などはいかがですか。

◎委員長（豊口　協）

私好きなんですよ、ナイフもかなり持っていましてね、それで包丁なんかも、私は実際料理をするもんですから、割合おもしろい包丁使ったりなんかしているんですけど、日本の伝統的な刃物というのは世界一だと私は思うんです。ですから、そういうものが新ながおか市の中から生まれて、今理事がおっしゃったけども、本当に新しいデザインの世界に共通するユニバースな刃物ができればですね、非常におもしろいなと思うんですね。

◎委員（安達正廣）

ちょっと今の件で補足させていただきますと、かんなでございますけども、今商工会の方で主催しまして、年１回でございますが、全国発信いたしまして、削ろう会という競技会でもないんでしょうけれども、１本の例えば柱をかんなを使っていかに薄く長く出せるかというような催しを年１回やっております。それから、先ほど大地さんの方からも鑑賞用という言葉ございましたが、これもやりがんながございます。先がこれぐらいなんでしょうか、ちょっと宮大工さんが使う感じのやつで、柄をつくりまして、そこにまき絵を施しまして、それを鑑賞用、飾り用としてつくっておられるという方もございます。

◎委員長（豊口　協）

何か大きく夢が膨らみそうな感じがしますので、よろしくお願いしたいと思います。

ほかにございませんか。

はい、お願いいたします。

◎与板町（石丸誠亮）

またちょっと補足になりますけど、削ろう会というのを商工会でやっていて、全国から遠くは四国、広島あたりからも埼玉、いろいろなところからいらっしゃいます。それは、一日のイベントでやっていまして、あと子供にも楽しんでもらうということで、小さい子供の台をつくって、子供に持たせてやったりとか、これ今まで２回やっているかな、これまた大変なイベントになると思いますので、よろしくお願いいたします。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

かんなというのは、台がまた非常に重要でありまして、刃と台との関係がかんなの生命になるわけで、その辺の道具の鍵みたいなことを子供たちが勉強して身につけると非常にいいなという気はいたします。

ほかにはございませんでしょうか。

それでは、今いただきましたご意見を事務局の方で整理させていただきまして、次の会議のときにご検討いただくというふうにしたいと思います。ありがとうございました。

では、続きまして意見交換という時間が設けられておりますが、この趣旨につきまして事務局の方か

ら説明をお願いします。
◎事務局（竹見）
　ただいま与板地域の地域別整備・活動方針ということで、本日示させていただいたんですけども、それぞれの地域らしさ価値ごとに実現すべき与板の姿ということと、それからそれぞれ見極める、発信する、育てるということで実現していくための活動展開をお示しさせていただきました。そうした活動展開あるいは活動方針から、新市がどういうふうなまちづくりをしていけるのか、そういったお考え、あるいはご意見を委員の皆様からいただきたいと思いますんで、よろしくお願いいたします。
◎委員長（豊口　協）
　それでは、今説明いただいた内容、そして今いただいたご意見をベースにしまして、新しい新市としてスタートしたときに、こういうことについては例えば注意をした方がいいとか、これは強力に一つのプロジェクトとして進めた方がいいというふうな点についてご意見がありましたらいただきたいと思います。
　先ほどの刃物は、非常に私はプロジェクトとしてはおもしろいなという気はしているんですが、というのはライバルすぐ近くにありますから、それをですね、凌駕するようなことができればいいなと気がするんですけど。
　ほかに何かございませんか。
　それから、大豆の生産が日本一でしたか、大豆。
　「生産は日本一ではないかもしれませんが、品質が」と言う声あり
◎委員長（豊口　協）
　品質が日本一ですね、これまたいいですね。
　このごろ新聞なんかにも出ていますけども、健康食ブームになっておりましてね、それで豆腐ないしは大豆を使った素材というのは日本では非常に多岐にわたってつくられているわけです。豆腐を初めとして、納豆とかしょうゆ、それからみそもそうですけども、そういう大豆文化の何かメッセージをここから送れるといいなという気がしますけど。今は、とにかく輸入された大豆が非常に問題になっているわけです。これは、品質の問題で。ですから、与板でおつくりいただいた大豆がですね、とにかく世界でも最高のクオリティーであるということを目指していくと非常に注目されるんじゃないかと思うんですけど。
◎委員（阿部誠一）
　新潟というのは、大豆というのは品質よくないんですよね、全国的に見ても。
◎委員（大地正幸）
　ただ、日本一という大豆というのは活かしていきたいと思うすよね。それが、品質だとしたら本物志向という点も考えて。
◎委員長（豊口　協）

実は私、納豆は割合好きな方なんですけども、水戸の納豆というのはやっぱり違うんですね。あれ不思議においしいんですよ、物すごく。だから、何かやっぱりクオリティーが日本一だったらこんなおいしい納豆ができるよとかですね、みそができるよとか、しょうゆがあるよとか、そこまで広がるかどうかわかりませんけれど、何かそういう新しい産業を興していけるようなベースになればいいなという気がいたします。

ほかに何かご意見はございませんか。

二澤委員いかがですか。

◎委員（二澤和夫）

いろいろな宝がありますし、いいところこれだけあるというのは十分わかったわけですけれども、今の長岡市と合併して新たに何が展開できるかというふうな観点から、今いろいろ刃物とかの、あるいは大豆とかの発展みたいなものが議論されているわけですけども、この独創企業が生まれ育つ都市として、育てるのところに大学との共同研究が抽象的には書かれているわけですけれども、具体的に例えばここへ、先生おいでですけど、造形大学と何か提携して伝統刃物を新しくデザイン化して売り出すとか、せっかく長岡市と合併するわけですので、合併したメリットというふうな観点がもう少し何か書ければなというふうな気がちょっとするわけですけれど。

それと、正直言いまして、阿部委員と同じで大判焼きの、これは結構なんですけれども、企業が生まれ育つのとどう結びつくのかなというのがいまいちぴんとこないところがございます、正直言いましてですね。これが、お焼きがどう発展していって企業と結びつくのかなというところになると、少し異質なのかなというふうに思うわけですけど。これは、名物としておいしいものがありますよという意味はわかりますけど、それが独創企業が生まれ育つという項とどう結びつくのかというのがなかなか難しいのかなという気がいたします。

以上ですが。

◎与板町教育長（水野）

申し訳ありませんが、少し補足させていただきたいと思うのですが。

与板、先ほどから大工道具という話がありますが、今助役さんから話があったように、かじ屋から先端企業に製品をつくっているという一例を申し上げます。

のこぎりをつくっている柄沢工業というところなんですけれども、技科大と提携しましてカッターを開発されたと、それとかつて親が与板町でかじ屋の職人をやりまして、三条に行かれまして、その息子さんが与板に屋根材のとめ金具、工場の波打った、そのとめ金具が日本全国のシェアナンバーワンということで、そういうことで単なるかじ屋のまちということじゃなくて、それが変化しまして、金属加工業といいますかね、そして非常にシェアが高いもんですから、元気がよろしいです。もう一つ、阿部産業という、これは今度配管関係の部品ですけれども、そういう元気のいい会社が育っております。

◎委員長（豊口　協）

どうもありがとうございました。

それでは、今大変貴重なご意見をたくさんいただきました。これを事務局の方でさらに整理をいたしまして、次の会でまたご審議をいただくというふうにしたいと思います。どうもありがとうございました。

◎事務局（高橋）

次回の予定でございますけども、２月９日が第２回目の協議会の予定になっておりまして、その前日、８日ですが、３回目の小委員会を開催をさせていただきたいと思っております。夕方の６時から、同じこの場所でございます。そして、３回目の２月８日には、協議会の方に報告する建設計画の素案まで、施策も含めた素案までを完成し、協議会に諮り、協議会の報告を経た上で、県との事前協議に入りたいと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。

事務局の方からは以上でございます。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

それでは、これで今日の会議を閉会したいと思います。ご協力ありがとうございました。

（散会　午後６時10分）